

英学再事始 一新たなる時代へ向けて一

(1)
(その1) 「読む」と「解説」とについて

上 田 見 二

1 はじめに

明治以降、我国の西洋文明吸収に果した英学（ここでは、汎く英語による学問を指し、必ずしも英語学・英米文学に限らない。）の役割の大きかったことについては、言うまでもない。それは、質及び量の点でスケールが違うかも知れないが、中国文化・文明の吸収に果した漢学の貢献に比することができよう。もちろん、フランス語、ドイツ語（特に医学分野）等の英語以外の外国語が、分野によっては、英語以上に重要視されてきた事実を無視することはできない。しかしながら、一般的に言って、英語は最も代表的な西洋語のひとつであり、同時に、最も国際語の性格を有する外国語である。

これから先国際的に生きていくことがますます必要とされる我国にとっては、この「国際語」である英語は、母国語である日本語に次いで重要であると言って過言ではないであろう。事実、英語は中学校で誰もが学び、さらに進んで高校・大学教育を通じて教えられる。英語と全く縁のない日本人は、少なくとも学校時代は、全くいないと言えるし、およそ『英語の先生』と呼ばれる人々の数は、英国のそれよりも多いと言われているのは周知の事実である。世はまさに「英語時代」である。

ところが、学校教育を通じて国語や数学（少なくとも中学・高校時代は）に劣らず力を入れて教育されているはずの、この外国語は、結果としては、極めて少数の日本人によってしかマスターされていないのが、「悲しい現実」である。少なくとも、費した時間と労力に見合う成果としては、また、学校時代はかなりの成績をあげた人達も、実際に英語を「ことば」として使うという状況下では、『学校英語は通じない。』というショックに似た気持ちを持つに至ることが少なくないことは、これもまたよく指摘される事実である。いわゆる「学校英語」がいわゆる「役に立つ英語」としてはいかに信用されていないかについては、各種のいわゆる「英会話学校」（英語学校と呼ぶ学校は、筆者は知らない。）に通っている生徒の実情を観れば、最も手っとり早く理解できるであろう。筆者もこの種の学校で教えた経験があるが、この「学校英語」の「卒業生」が多かったことには、いつも驚かされたものである。中には、「現役の」英文学科専攻生（それも一流の大学の）を見かけることも少なくなかった。

これらの「元「学校英語」学習者」に共通して言える点は、読んだり書いたりする勉強は、学校時代に「うんざり」する程やったので、こんどは「役に立つ」英語を身につけたいと望んでいる点である。「役に立つ」英語を身につけるには、英語の中でも「別の世界」と考えられている「英会話」を勉強しなければならないとする認識である。しかしながら、この相当に図式的な認識は、それなりに当面の問題を解決する能力をある程度は持っているが、本質的には誤れる認識と言わねばならない。そして、この「誤れる認識」こそが、彼等が言うところの「役に立つ」英語さえも、結局は十分ものにするのが出来ない結果の大きな原因のひとつになっているのである。では、いかに「誤れる」のか？ 二つの最も本質的な問題が存在する。

先ずなによりも、読む・書くことのアンチテーゼとしての「英会話」などというものは、多くの「元「学校英語」学習者」が考えているようには、言語学的には存在し得ないという真理を指摘しなければならない。詳細な説明は省略して、これら多くの「誤れる認識」者達にも誤ることなく理解してもらうために、この認識に基いた文法上正確な日本語を連続していくつか書いてみることにする。

→『私は英語は読んだり書いたりは出来ますが、話すことは出来ません。』

→『先生（＝筆者）は、こんなこと尋ねて失礼ですが、話す方も出来ますか？』

→『近く、（話者＝英文学者が）アメリカへ留学するので、泥縄だが会話の勉強を始めたヨ、キミ。（英語教師が）全然話せないじゃ、やっぱり恥かしいからねエ、キミ。』

以上はすべて筆者が実際に聞いた友人や知人の日本語である。毎日、日本中で、日常的に用いられている日本語でもあろう。問題は、この種の日本では「ごくありふれた」表現の基底に、本来英語を「話す」世界と英語を「読む・書く」世界は「別もの」であり、かつ、前者なしに後者が存在し得ると信じている認識が横たわっているという事実である。日本語の場合を考えてみれば、誰でも容易に理解できることであるが、「読み・書き」の出来る人で「話す」ことが出来ない人が、はたして居るだろうか？ もし居るとすれば、それは聾啞者であり、そうでなければ、極めて極めて異常な言語障害者であろう。“I can read and write, but I can not speak English.”—これは日本人のインテリがよく使うセリフであるが、これを聞いた相手の外国人は、大なり小なり不思議そうな表情を見せる。

次に、「役に立つ」英語の認識であるが、はたして「話す」世界だけが、彼等の考えているように、「役に立つ」のであろうか？ 逆に言えば、「学校英語」の主体であった「読み・書き」は「役に立つ」ことはないのか？

答は自明である。大多数の日本人が英語という外国語を学ぶ現在でも、大多数の日本人はその外国語を「話し」て「役に立」たせる必要性を持ってはいないのである。母国語である日本語以外の言語でコミュニケーションする必要性を持っている人の方が、比較にならない程少数であるからである。これと対照的に、英語を「読み・書き」（特に「読み」の方は）することは、外国人を見かけることすらめったにない日本人でも、「役に立つ」はずである。もし「出来れば」。特に、「書く」能力について言えば、もし「出来れば」、これは「役に立つ」能力であるばかりか、まさに「すばらしい」能力と言える。

要するに、「出来ない」からこそ、実際には「役に立つ」ことの少ない（よく言われる「死んだ」）「学校英語」に終わってしまうだけなのである。

先に、英学の「先輩」として漢学をあげたが、漢文の学習（これは、後に述べるように、質的に違う性格が強いけれども）が少なくともそれに費した時間と労力に見合う成果をあげた事を考えると、これまでの、いや今日の英語教育は全く「なさけない」と言わねばならない。何と言われてもこれだけ「大さわぎ」して、これだけ「出来ない」人間を大量に送り出してきたのだから、弁解の余地はないであろう。

「弁解の余地」はないが、研究の余地は大いにある。

「英文学」を専攻し、現在それを大学で教えている筆者が、何故に本稿で本題を論じるかと言えば、それは極めて単純な論理になる。即ち、英文学を研究するためには、何よりもまず、英語が読めなければならない。それも短時間で大量に。しかし、現実には、なかなか「読めない」。それも長時間で少量しか。読めなければ「お話しにならない」のであれば、読めるようにするためには如何にしなければならぬか研究しなければならぬ。それには先ず、「読む」とは何か——これから始めねばならない。ここから事を、英学という事を再び始めねばならない。

2 認識の曖昧さ；区別概念の必要

前述のごとく、最も多くの日本人に最も「実用」（実際に役に立つという意味で）である英語のアスペクトは、実は「読む」である。いかに交通機関（特に飛行機）の目を見はる発達によって世界が狭くなったとは言え、一般の日本人にとっては、英語という外国語は、よほど知的生活に対する志向性の強い稀な人達を除けば、その「生活」のレベルでは「用のない」言語であると言える。言い換えれば、英語に文字どおり「用のある」日本人と言えば、それは「生活」ではなく「仕事」の上で英語が必要である人々を指すことになる。諸々の職種が考えられるが、その最たるものは、英語教師である。その数の非常に多いことはすでに述べた。次に、英語が仕事の上で（程度の差はあっても）役立っている人々。これには大きく分けて、英語を話すことが主として「実用」であるグループと、「読む」ことが「実用」であるグループ、さらに両技能が「実用」であるグループの三グループが存在する。第一のグループについては、日本の諸企業が国際化するにつれて、年々ますます増えているであろうが、自分の仕事に話すことが決定的要素として存在する職業の種類とそれに従事する人の絶対数は比較的少ないと考えられる。第二のグループは、書かれた英語から自分の職業に役立つ情報を得る職種を指すが、これはさらに分類すると、利潤追求の「商売派」と学術・研究目的の「学問派」とに二分される。前者については、この種の仕事を専門に処理するセッションがあるが故に、その人数も限られる。問題になるのは、後者である。研究等の目的で外国語の書物・文献等から情報を得る必要のある場合、口頭コミュニケーションが通訳を身近かに置くことで可能であるのに対して、どうしても自力でやるより他に方法がない場合が多い。もちろん、翻訳という方法があるが、通訳と違って、身近にいて助力を願うことは不可能であり、翻訳書が出版されるのを待たねばならない。しかし、研究対象が専門的になればなる程、翻訳の迅速さはもとより翻訳自体が期待できない場合が少なくない。従って、専門の研究者の多くは、外国語の書物を読む際は、好むと好まざるを問わず、自ら翻訳者の役を演じなければならないし、現実にそうしているのである。それも、「涙ぐましい」という形容が当てはまる場合の多いことは、筆者も公的・私的経験から自信を持って言える。例えば、大学院の学生が特に専門的でもない英文の数ページ（即ち、普通の頭を持った英米の高校生なら10分もあれば正確に読める量）と、一腕かかってまさに「格闘」している姿は、「涙ぐましい」以外の何ものでもない。第二のグループのこの「学問派」の数は、研究者の卵である学生まで含めると、相当に多い。しかも、高等教育の普及によって、この数はますます増大することが予想される。筆者が最も問題にしたいのは、（英語で「めしを食っている」英語教師集団はもちろんのこと、）実はこの人数の意外に多い研究者集団である。第三のグループの人数も相対的に限られたものである点を考えると、一層これら二つの集団が問題になってくる。

この各種研究者から成る集団は、今までみてきたように、その人数に於て、英語を「実用」とする他のグループと比較にならないと言えるし、次に、その「実用」性の特性は、何よりも「読む」という点にある。高等教育在学中の研究者の卵達も含めて、かくも多くの日本人が、程度の差こそあれ、自分の専門に関する英語で書かれた書物等を「読む」ことを余儀なくされており、しかも、この「読む」という技能が、英語の他のアスペクトにもまして「実用」であるという事実、英語教育関係者はより注意を払うべきである。筆者は、この点はいくら強調しても強調しすぎることはないと思信する。

「実用英語」という用語が最近よく用いられるが、この場合の「実用」は、従来の文法・訳読中心の「学校英語」のアンチテーゼであり、イメージとしては「ペラペラしゃべる」像に基づいているようであるが、この「ことば」もかなり不正確なものである。今まで考察してきたように、英語という異国のことばを「しゃべる」即ち話すということは、我々日本人にとっては通常の「生活」のレベルでは、ほとんど無縁のことである。この意味に於て、「話す」英語は世の人々が考えてい

る程には「実用英語」ではないのである。確かに、従来の「学校英語」が役に立つ英語であるとはいろいろな意味で言い難いが、だからと言って、そのものの構成要素である文法・訳読の自動的なアンチテーゼとして、「しゃべる」英語を設定し、これを以って「実用英語」とするのは、一見自然なように見えるが、その実、現実的ではない。何が「実用」かは現実が決める問題である。

恐らく、英語の“practical English”の訳かもしれないが、この英語自体が、“English conversation”や“free discussion”等と同様に「変な英語」である。変な外人ならぬ「変な英語」である。English と言えば、それが現代語である性質上、practical であるに決っており、conversation と言えば、その言葉が英語である以上、わざわざ「英語の」と言う必要はないし、“discussion”はその本来の性格上“free”なものに決っている。生成変形文法（特に、いわゆる 拡大標準理論）は「焦点」、「前提」という概念を用いてこれらの英語が英語として成り立つことを説明するが、いずれにせよ、普通の「ことば使い」ではない。

ここで Chomsky を持ち出すのは、当面の目的上それこそ“practical”でないので、控えるが、筆者が強調したいのは、一般の日本人にとっては、国際化時代とは言え、英語という異国の言語が“practical”である場合は非常に少なく、それが“practical”な言語として必要な人は数の上で限られているし、その限られた人々の大多数にとって、英語のどのアスペクトが“practical”かと言えば、それは「読む」というアスペクトであるという厳然たる事実である。

「読む」英語の「実用性」については、問題点が明らかになったと確信する。次に、その最も「実用性」の高い「読む」ことが何故にかくも難しいのかという問題について考察してみることにする。

多種の問題が存在するが、最も根源的でありながら最も見過ごされている問題点を指摘することから始めよう。それは、いわゆる「実用英語」と呼ばれている英語が実際は必ずしも「実用」ではないのと同じように、「読む」という言葉の下で行なっている行為の多くが、実は「読む」というよりは何か他の言葉で表現された方がより正確に表現され得る行為であるという点である。我々は通常日本語を「読む」というのと同じように、英語を「読む」と表現するが、この二つの「読む」には、言語学的に見て大きな違いがある。しかも、本質的な違いが。

我々はみな、母国語の音声と意味を結びつける能力を所有している。即ち「ことば」という音声を耳で聞けば、同時にそれは「ことば」の「意味」と結びつく。次に成長して文字を学ぶようになると、文字は本来「音声」であるところの「ことば」を表わすものとして機能する。即ち、真の「読む」という行為は、「同時に」意味を把握するという行為に他ならないものである。この「同時性」こそが、真の「読む」行為の本然的特質である。言い換えれば、この「同時性」を持たないものは、たとえ良く似たものであっても、真の「読む」ではない。

それでは、読んだけれども「同時に」意味が握めない場合——実は、我々が外国語を読む場合にはよくあることだが——には、これは一体何物と言えるのであろうか？

実は、これこそが「問題の中の問題」とでも言える重要な点であるが、かかる言語学的現象は、厳密な意味で「読む」ではない。似而非なるものである。人間は普通、自分の母国語で自分の言語生活を満足させるが故に、このような言語学的事件に遭遇することは稀である。従って、これには「読む」という用語ほど一般化された用語がない。あるのは、「読む」という言葉が表現として明らかに妥当性を欠く極めて極端な場合のみである。何か「うじゃうじゃした」、「わけのわからない」文字の連続を、母国語を読むのとは比較にならないほど長時間かけて読み意味を握もうと努力する行為——これには、昔からこれに「ふさわしい」言葉があった。即ち、「解説」という言葉である。これになると、「読む」とは似てもつかぬイメージを与えてくれる。問題はこの中間に存在するものである。「同時性」は伴わないが、結果的には（その程度の差はあるにしても）意味を握める作業を何と呼んできたか？

「訳す」、「翻訳」という言葉がある。然しながら、ここで注意しなければならないのは、これらは本来関係両国語を「自分の言語」にしてしまっている人の行う行為を表現するもので、文字は認識できたにもかかわらず意味はなかなか把握できない人のそれを指すものではなかった。しかし他により適切に表現する言葉がなかったが故に、これらの言葉で言うてみれば「間に合わせ」できたのである。従って、「この英文を訳（翻訳）せ。」という場合には、二通りの意味が考えられる。即ち、英文が「読める」が故に「訳す」場合と、英文が英文としては「読め」ないが故に「訳す」場合とがある。「読めるが故」と「読めないが故」とでは、似ているどころか正反対である。

それぞれの言葉の意味を正確に理解し、用いるたびに、その真の意味をたえず意識していれば、問題は少ないのであるが、実際は、人間は同じ言葉を用いられると、同じ意味に取りがちである。これは当然のことであり、ここから新しい問題が生じてくる。つまり、「同時性」を伴った真の意味での「読む」も、「読む」ことが出来ないが故に「訳」して読む場合の「読む」も、同じ「読む」という日本語で表現されるのである。本質的に異なった言語学的行為に対して、同じ表現が用いられたのであり、その結果として、本質的に同じ行為もしくは似た行為を行なっていると考えられることはあっても、本質的に異なる行為をしていると意識することは非常に稀になってくる。前述の『英語は読んだり書いたり出来ますが、話せません。』という日本のインテリの言葉が、このことをよく表わしている。必ずしも彼等を責める訳にはいかないことが、ここまで考察してくれば自然と明らかになってくる。言葉の方にも責任があるということである。即ち、同一の言葉を使えば、異質意識が稀薄になるのは無理もないことである。

似てはいても本質的には違う行為であるならば、同一の言葉を使うよりは、本質的に全く違うことが明確に表現される別の言葉を使う方がより科学的であるという事は何人も否定できない。この意味から、筆者は「解説」という言葉を替りに使うことを先ず提唱したい。若干「大げさ」な響きがしないこともないが、少なくとも、違うものを同じように呼ぶよりは良いであろうし、とかく自分には甘くなりがちな人間に対して、過大評価を戒める効果も考えられる。（以後、この意味で「解説」という用語を使うことにする。）

詰まる所、「読」んでいるのか「解説」しているのか——それが問題だ。

西方をめざす船が結果として西方へ到着するのは、本船は西方へ航行していなければならないという認識と、さらには、北は西でなく、南も西でないのと言うまでもなく、西北西や西南西でさえも、西に近いがあくまで西ではないのであるという認識が、前提として存在するからである。この前提認識が少しでも正確性を失う時、船は西へ到着することを期待できない。

これと同様に、「読む」ことをめざす人々は、まず「読む」ことをめざし続けねばならないと同時に、「読む」とは何かを出来る限り正確に把握していなければならない。似而非なるものも「読む」と認識してしまえば、その船同様目的達成はおぼつかないであろう。（以下、「同時性」を伴った真の意味の「読む」を**R**、「解説」を**D**と略すことにする。）**R**をめざす学習者は、**D**は**D**であって、あくまで**R**ではないという明確な区別概念を持つことが先ずなによりも必要である。この意味で、日本の英語教育は大いに反省しなければならないであろう。**R**なのか**D**なのか。それが問題だ。

3 「解説」；そのメリット

今日では、学校の英語教育の大半を事実上占領してきた**D**は、「罪人視」されることが屢々あるが、我々はこの**D**の持つ一般的メリットと実績を忘れてはならない。決して英語を母国語のように「自分のことば」にした訳でもない明治以降の諸々の研究者・学者が、それにもかかわらず、西洋の文明を英語を通じて吸収してこれたのは、他でもない、この**D**のお陰であった。

Dの強みは、**V** (=語彙) と **G** (=文法) の二要素さえ満足であれば、何とか成り立つ点にある。**V**は辞書があれば済むし、**G**は文法書があればよい。あとは、要するに熟練の問題である。**V**が記憶されている度合と、**G**の習熟度に比例して、**D**の能率は上がる。さらに、**D**は母国語へ結果させる行為であるからして、結果した訳文が意味を成すか成さざるかは、**D**者に判断能力がある。従って、意味を成さない訳文に結果している場合は、「訳しなおす」作業を、意味を成すまで繰り返せばいいのである。

漢文は、中国語の文章を(古典的で文語のものがほとんどではあったが)、外国語としてマスターすることはしないで、**D**により日本語として処理するという日本人のすばらしい発明であった。表意文字という特殊性はあったにせよ、当の中国ではそれぞれの文字が何と発音されるかについては関知せず、もっぱら**D**に徹して効果を上げた。紅顔の少年にして、一級の古典を我が教養とすることが出来たのは、この**D**の効用である。もし従来の学校英語教育のごとく**D**以外にも“中途半端”な努力を傾ける伝統が存在していたならば、漢文教育はあれほどの成果をあげなかったに違いないのである。何よりも**D**で押し通した所に成功の原因がある。

これに似た**D**の成功例が最近英国の大学から報告されている。⁽²⁾それも我が日本語の学習・教授に関してである。日本の特許庁から送られてくる専門書類を英語に**D**する技能者を実験的に養成するプログラムである。報告によれば、三ヶ月という所期の時間で一応の成功をおさめたとされている。日本語が**R**できる能力は**D**よりも高等なものであるが、それだけに莫大な時間がかかるため断念し、そのかわりに、言ってみれば“当たらずとも遠からず”の英文に直せる技能者(もちろん英国人の)を短期集中方式で養成したという訳である。何よりも興味を持ったのは、このプログラムの名称に、他ならぬ「解読」という語を使っている点である。**R**と**D**の区別概念の上に成立した**D**の集中訓練の大成功である。心から拍手を送りたい気持である。

次に、筆者自身もこれに似た実験を個人の単位で試みた体験があるので、簡単に触れておきたい。対象は全く未知のロシア語、目標は逆**D**の方法でロシア語の手紙を出来るだけ文法上正確に書き、次にその返事を日本語に**D**することであった。第一にロシア語のアルファベットの学習、これは思ったより楽で、5時間ほどで全体像を握めた。次に“にわか憶え”の文字の有機的結びつきを理解するために、露和辞典を引く訓練へ入った。一晩かかってしまったが、どのような単語でも、何とか辞書の中に見つけ出す自信を持った。“本来の姿を変えた”語(動詞の活用や名詞の語尾変化等)をチェックするのは大変なことだが、文法は**D**する際にひとつひとつチェックする程度に慣れることは可能であった。広島でたまたま遇った旅行中のソ連の作家に、何か月もたってから急に思いついたように試みた実験であったが、手品師のようなトリックに満ちた方法で何とか正確と思われる手紙を書き上げ、投函した。返事を手にした私は、さっそくロシア文を**D**してみても驚いた。彼が私がロシア語をかたくも短期間にマスターしたことに驚いているという意味のことが書かれていたからである。それは一種の外交辞令と解したが、その先を**D**し続けていくうちに、この作家は本気である、即ち完全に私の逆**D**のトリックに引かかっていることを認めた。作家は次のような意味の文を続けていたからである。石川達三の『戦争』という作品が「パイカル誌」に載ったが、この種の日本の作品を翻訳して送って欲しい——と。筆者は思わず吹き出したが、同時に、短期養成の**D**の魔力といつまでたっても“本物”の域にはなかなか達することのない**R**の不可解さについて考えさせられたのである。(この記念すべき手紙は、一種の註として稿末に載せておく。参照されたい。)⁽³⁾

4 「読む」とは；初原的認識への回帰

では、**R**とは一体何であるのか？

Dの構成要素が**V・G**であることについては、今までの考察で明らかであるが、**R**のそれはどの

ように表現されるのであろうか。右の fig. 1 を参照されたいが、**S** は「音声」を、**T** は「時間」という要素を表わし、(この筆者の提唱したい一種の公式は、)「**VG upon ST**」と読む。**T** の上に成り立つ**S**、さらにそれ全体の上に成立する**V・G**という関係であり、**V・G**だけで**D**が可能であるのに対して、**R**はその**V・G**が**ST**の上に成立していなければならないという本質的な性格を持つ。**S**は本来特定の**T**(即ちスピード)を持つものであるにもかかわらず、あえて**T**を強調したのは、この**T**こそが最大のカギを握っているからである。

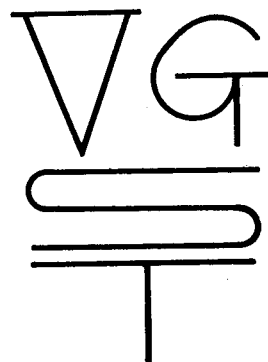


Fig. 1

ひとつひとつの単語が比較的正確に声に出して読め、聞いていた教師はそれだけで意味がつかめるのに、当の本人は「サッパリ」意味を解していないということが、英文学等を教えていて時々起こるが、これはその学生(生徒)はまだ**T**を伴った**S**が出来ていない、即ち**R**は未完成で、内容理解は**D**にたよることを意味する。

先に**R**の**R**たる存在理由は「同時性」にあると述べたが、同じ文章でも黙読と朗読とでは、この「同時性」の時間が違ってくる。(ここでは、書かれている「内容」の読むスピードに与える影響については論じないことにするが、)普通、朗読のスピードは、本を読むスピードとしては遅いのであるが、このスピードでさえも英文の意味が正確に伝わらないとすれば、その人は**R**しているというより**D**していると言わねばならない。従って、**ST**は、具体的には、「遅くとも、ゆっくり声に出して読むスピード」を指すことを意味する。さらに、ゆっくり声に出して読むことは即ちゆっくり著者の立場で語る(=話す)ことである。とすれば、**ST**は、話せるという能力がなければ成り立ちにくいということになる。ここまで論じてくれば自明の真理として、この**VG upon ST**とは、読むというアスペクトから観れば**R**のことであるが、これは他でもなく**L**(=言語)そのものの姿である点が重要になってくる。換言すれば、**R**とは他でもなく**L**そのものであり、**D**が**D**だけ訓練することによって大きな成果を生むことが可能であるのに対して、この**R**は**R**だけ独立して考えることは出来ない性格を持っているのである。**R**を本当に身につけるためには、**L**を本当にマスターしなければならない。

結局、極めて初原的な認識へ回帰してきた訳であるが、この認識の上にすべてをやり直す必要があることを強調したい。

5 結論；具体的対策の必要性

本稿では、真の「読む」とは何かという問題を、そのアンチテーゼとしての「解説」の本質を究明することを通じて考察してきたが、これからの英語教育に於ては、次の点が最も重要であることを再度強調したい。

- 1) 最も実用的である「読む」分野が今までにも増して重要視されねばならない。
- 2) 本当に「読む」ことが出来るようになる為には、英語そのものが「自分のことば」にならねばならない。
- 3) 中途半端に教育するぐらいなら、むしろ「解説」に徹する方が賢明である。

最後に「では、いかにして英語を『自分のことば』にするか」について、以下の提案をすること本稿を終ることにする。

- 1) 今までの**LL**等の音声重視から一歩進んで、「音声+映像」の重視というソフトウェアを確立し、それを16mm等のハードウェアで十分に活用すること。これは入門期に集中的に学習の主体として行なうことが最も望ましい。

2) 第二次世界大戦中の米軍による短期集中外国語訓練の実績を賞讃するだけに終らせず、その方式を、大学に於ける専門教育の場で、出来る限り具体的に実践すること。例えば、英語・英文学専攻生を、入学と同時に適当な「短期集中訓練所」に入所させ、数ヶ月間その中で「カンズメ」教育をする等の構想は、関係者の「ヤル気」さえあれば、十分に実現可能と考えられる。特に文部省は、全国の国立大学の中にある英語・英文学関係の学科に所属する学生の為に、この種の研修の場を考えるべきである。各大学に任せず、国立大学共同のセンターを日本中のどこか適当な場所に設立し、関係学生を「入学と同時に」入所させ、いつも問題になる一般教育も可能な限り当該センターに於て有資格の英米人等が学習目標の英語で行なう。これは決して不可能な構想ではないはずである。

註

- (1) 本稿は、第7回「西日本言語学会」(1977年9月17日、於広島文教女子大学)で“To be a reader or a decipherer, that is the question; Look back in anger, and look forward with hope.”と題して口頭発表したものに基づく。
- (2) 『日本語教育』(1973)、日本語教育学会を参照されたい。
- (3) 参考のため以下掲載しておく。ロシア語が「読める」諸兄のコメントを望む次第である。

Здравствуйте, уважаемый *Вади*-сан!

Приношу глубокое извинение за то, что не сумел ответить на Ваше любезное письмо вовремя. Был все время в разъездах и очень занят.

Меня глубоко тронуло, что Вы столь усердно изучаете русский язык и что начинаете читать мой роман "Поющие стрелы". Желаю Вам успеха в изучении языка. Он стоит того, чтобы над ним трудиться. Читать в подлиннике великого Льва Толстого, читать Достоевского и Шолохова - это наслаждение, ни с чем не сравнимое. Это говорит Вам писатель, который русский язык изучил уже после того, как прошло его детство - ведь мой родной язык бурятский. "Поющие стрелы" я написал по-русски. По-бурятски мною написаны рассказы, пьеса, двенадцать листов исследования по фольклору Унгийнской долины, около трех листов вступительной статьи-исследования к улигерам сказителя Аполлона Тороева.

В нашем журнале "Байкал" напечатан рассказ японского писателя Исикава Тацудзо "Война". Он понравился нашим читателям. Между прочим, у меня к Вам есть предложение, которое Вам, думается, понравится. А что, если Вы для лучшего изучения русского языка, чтобы осмысленно практиковаться на нем, начнете делать подстрочные переводы с японского очень коротеньких новелл японских писателей. Мы бы сумели обеспечить художественную обработку Ваших переводов и печатали бы в журнале. Разумеется, надо выбирать новеллы писателей не фашистского или расистского толка, а прогрессивных, гуманистического направления. Идет? Попробуйте.

С уважением

Африкан Бальбууров

21 июля 1972 г.

Африкан Бальбууров.

*В.В. Вам передает привет моя супруга
Антонина Александровна.*